

## 里山に学ぼう、里山を教えよう： 2002 年環境教育シンポジウムをふりかえって

平吹喜彦\*・川村寿郎\*・中澤堅一郎\*\*・西城潔\*\*\*・齊藤千映美\*\*\*\*・溝田浩二\*\*\*\*

Learning in Satoyama, Teaching on Satoyama: Symposium 2002 by the Satoyama Research Project

Yoshihiko HIRABUKI, Toshio KAWAMURA, Ken-ichiro NAKAZAWA,  
Kiyoshi SAIJO, Chiemi SAITO and Koji MIZOTA

### 1. はじめに

里山や里地は、人為と自然環境が調和する多様な生態系が存続してきた場として、また循環と節約に基づく暮らしが営まれてきた場として、21世紀の社会を構築する際のモデルの一つとして認識され始めた。それは、地域をみつめることを大切にして、縄文時代に遡るほどの年月をかけて育まれてきた自然特性、およびそれに合致した伝統的な生産・消費活動のあり方を学際的に検討し、その成果をこれからの環境調和型社会の形成に反映させてゆこうとする取り組みであるかのようにみえる（武内，1991；大沢・大原，1995；亀山，1996；守山，1997；武内ほか，2001；広木，2002）。

私たちは宮城教育大学内に丘陵里山研究会を組織し、個々が立脚する自然科学の専門領域を大切にしながら、ヒトの行為という人文社会学的領域にまで調査対象を拡張させ、相互の知見を重ね合わせながら、上述した課題にアプローチしてきた。その際、環境科学の取り組みの多くがそうであるように、①フィールドとする場（地域）へのこだわりと、②情報や人材のネットワーク化、③地域との連携に基づく実践活動の促進を重視した活動を行ってきた（平吹・川村，2000；川村ほか，2001）。今回の「里山に学ぼう、里山を教えよう」シンポジウムは、丘陵里山研究会の活動が6年目、第2期の終了年度を迎えたことを機に、活動の検証と発展への足がかりを得ることをめざして開催された。とりわけ、宮城教育大学附属環境教育実践研究センターのプロジェクトに採択されている「仙台圏の丘陵里山における環境教育の展開」を強く意

識して、学校あるいは居住地域を実施単位とする、身近にある里山をいかした環境教育の推進に焦点をあてた。

シンポジウムの開催にあたっては、仙台市科学館と仙台市泉区堂所地区の皆様から、格段のご支援を賜った。また、高橋雄一氏（元仙台市太白山自然観察の森館長）と枝松芳枝氏（みやぎ環境教育ネットワーク里山NGO）には、ボランティアとして、ご講演や野外観察のご指導をいただいた。宮城教育大学の大学院・学部にも所属する宍智智美・阿部剛・新谷真吾・今野亨・瀬戸義悦・野田貴洋・林出美菜・福岡公平・佐々木裕之・佐藤麻衣子・菅原和男・高野洋平・長谷川巧・齋藤広大の学生諸君の力添えがなければ、本シンポジウムは実現しなかった。皆様に心から感謝申し上げます。

なお、この小文は、「仙台圏の丘陵里山における環境教育の展開」プロジェクトの世話人である平吹、および本シンポジウムのコーディネイターを務めた川村の責任でとりまとめたものである。シンポジウムの講演内容を含むプロジェクトの研究成果については、稿を改め、一括して報告する予定である。

### 2. シンポジウムのねらい

丘陵里山研究会では、仙台都市圏の丘陵地を主たるフィールドとして、調査・啓蒙活動を行ってきた。それは、①元来、この地域では丘陵地が卓越し、そこには谷津田－住居－背戸山を基本単位とする里山が広がっていたとみなされること、②近年の住宅・産業団地などの大規模造成によって、伝統的な自然環境が

\*宮城教育大学教育学部理科教育講座，\*\*仙台市科学館，\*\*\*宮城教育大学教育学部社会科教育講座，\*\*\*\*宮城教育大学教育学部附属環境教育実践研究センター

一変するとともに、多くの移住住民が生活する状況となったことを重視したためである（川村ほか，2001）。ちなみに，新世紀を築く子どもにとっての日常生活圏という意味で，学区の分布状況に着目してみると，仙台都市圏（仮に仙台市・名取市・富谷町・多賀城市・塩竈市・七ヶ浜町・松島町・利府町・大郷町・大和町とした）に設置された小学校 181 校の 72%，中学校 96 校の 81%において，学区内にこうした丘陵地が存在すると見積もることができる。身近な丘陵地や里山が担うべき役割は大きく，それゆえ多様な要求に応え得る教育力や自律的修復力を尊重した活用手法をいねいに抽出する作業が求められているのである。

そこで，今回のシンポジウムでは，①こうした丘陵地や里山が保有する（あるいは，保有していた）二次的な自然環境や持続的生活システムの実態・魅力について紹介し，②環境教育に活用してゆくための視点や方法，その有効性を討論するとともに，③シンポジウム参加者間，特に学校を核とした地域と大学間の協働に基づく実践活動（図 1）の可能性を探ることを具体的な目標とした。

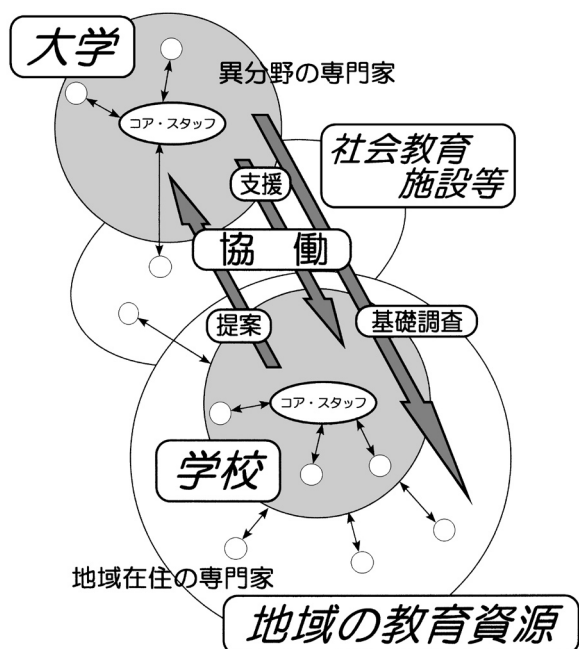


図1 「学校を核とした地域」と「大学」との連携のモデル。

### 3. シンポジウムの概要

シンポジウムは，2001 年 6 月 15 日の 9:30 から 16:00 にわたって，二部構成で開催された。その実施次第は，以下に列記した通りである。

第一部では，仙台市科学館を会場として，基調講演や座談会，ポスター講演のほか，自然環境に関連した科学館内の展示見学，持ち寄った資料や教具の展示などが行われた（写真 1）。参加者は 46 名（うち 12 名が教諭）であった。なお，最近の私たちの調査・教育実践は，宮城県北部や岩手県南部の里山・里地にも及んでいることから，ポスター講演ではこうした取り組みも併せて紹介することとした。

第二部は，典型的な里山の自然環境が残る仙台市泉区堂所地区において，景観や土地利用，動植物，暮らしの工夫を探るエクスカーションとして実施された（写真 2）。参加者は 25 名（うち 8 名が教諭）であった。堂所地区の下流側からゆっくりと歩き始め，集落を縦断して，上流に構築された溜池とその背後に広がるコ



写真1 活発な意見交換がなされた討論会。



写真2 すり鉢状の炭焼き窯跡を囲んで。

ナラ林に達するルートで、あぜ道や水路、水田、いぐね、ほこら、炭焼き窯跡、スギ植林などにも立ち寄りながらの野外学習となった。

#### ーシンポジウムの実施次第一

##### 第一部

###### 1) 基調講演および座談会

10:05-10:40 基調講演

高橋雄一 (元仙台市太白山自然観察の森館長)

「里山の現状と魅力」

10:55-11:55 座談会「里山を介した環境教育」

司会 川村寿郎 (宮城教育大学)

討論者

高橋雄一 (元仙台市太白山自然観察の森館長)

昆虫・自然史の視点から

枝松芳枝 (みやぎ環境教育ネットワーク里山NGO)

伝統的な暮らし・市民活動の視点から

中澤堅一郎 (仙台市科学館)

科学館における環境教育の視点から

西城潔 (宮城教育大学)

地形・景観の視点から

齊藤千映美 (宮城教育大学)

環境教育・環境保全の視点から

平吹喜彦 (宮城教育大学)

植生・生態系の視点から

###### 2) 展示見学

12:00-12:30

仙台市科学館内の自然環境に関わる展示を観る

解説 中澤堅一郎 (仙台市科学館)

###### 3) ポスター講演

9:30-12:00

(1) 新谷真吾 (幸町小学校)・川村寿郎 (宮城教育大学)

都市化による丘陵里山の減少を知るー仙台北部丘陵地域における土地利用の変遷ー

(2) 齋藤広大・齊藤千映美 (宮城教育大学)

サルはなぜ、里山を下りてきたの？

(3) 西城潔 (宮城教育大学)

丘陵地とは？ー地理学の立場からー

(4) 寂知智美・平吹喜彦・川村寿郎 (宮城教育大学)

植生から解き明かす里山のしくみとその教材化

(5) 林出美菜・平吹喜彦 (宮城教育大学)

里山の深層にあるブナ林

(6) 溝田浩二 (宮城教育大学)

虫の目でみた青葉山ー2002年初夏ー

(7) 高橋雄一 (元仙台市太白山自然観察の森館長)

植林ボランティアによる「森の美術館づくり」

(8) 福岡公平・平吹喜彦 (宮城教育大学)・三浦修

(岩手大学)

農村景観をはぐくむ屋敷林をいかした地域学習

##### 第二部

###### 1) エクスカーション

13:30-16:00

里山の伝統的景観と暮らしが維持されている仙台市泉区堂所地区をたずねる

解説 高橋雄一 (元仙台市太白山自然観察の森館長)

川村寿郎・平吹喜彦 (宮城教育大学)

#### 4. おわりに：シンポジウムの成果と課題

高橋雄一氏による基調講演では、里山を代表する生態系である雑木林（仙台都市圏においては、コナラ林とほぼ同義）でみられる森林の垂直的構造や、指標的な動植物とその生活史、生物間の巧妙な共生・すみわけ関係、ヒトの伝統的管理手法などについて、長年にわたって撮影された見事なスライドを用いた説明がなされた。座談会では、専門を異にする6人の討論者が、それぞれの専門・実践に立脚した里山観を表明した後、それぞれの専門・実践に立脚した里山観を表明した後、保全・活用の具体的方法について意見をかわした。聴衆からも、体験活動に基づいた質問や意見が出され、活発な議論が展開された。その中で、枝松芳枝氏が「交流を介して、まず地域の人々自身が『里山に普通にある営みこそが貴重なのだ』と気づくことが重要」と指摘し、高橋雄一氏が「里山の自然は、攪乱ともいえるヒトの行為が適切に加わってこそ存続しうる」と強調されたことは注目を集めた。聴衆からは、「活動がノスタルジーに浸るだけのものではいけない」、「学校全体のコンセンサスを得ることが難しく、企画段階でつまづいてしまう」、「教諭も、生徒も、校外に出向くための時間的余裕を見つけ出せない」といった、厳しい見解も出された。

持ち寄った資料（研究・教育実践報告書、NPO機関誌、パンフレットなど）や教具（カードリーダー式の野鳥観察器具など）の展示、そしてポスター講演では、短時間ではあったが、それぞれの活動・成果がいきいきと紹介され、参加者との間で熱のこもった意見交換がなされた。なお、ポスターについては、仙台市科学館のご好意により、6月20日から7月2日までの13日間、科学館正面玄関ロビーに展示された。講演者や討論者の間で、わかりやすい提示を心がけるように申し合わせたことが効を奏したともいえよう。

堂所地区のエクスカージョンでは、シンポジウム第一部で話題となった景観や動植物、伝統的な暮らしの一端に接する活動が展開された。カエルやヤゴ、水草などの水生生物に触れたり、炭焼き窯跡が点在する雑木林で往事の施業行程をふり返ってみたり、棚田の最奥部に連なる溜池で四季にわたる水管理手法の説明を受けたりと、全身を使って、たくさんの事象に出会うことができた。

今回のシンポジウムにおいて、それぞれの参加者が蓄積してきた成果やアイデアを披露しあい、立場の違いを認識しあえたことは有意義であった。丘陵里山研究会としても、市民や教諭と新たなネットワークを構築することができたことは大きな収穫であった。しかし一方では、市民や学校との連携を進める上で、情報公開や事業の企画・実施に関わる私たち自身の取り組みがまだまだ甘く、独りよがりな点が少なくないことも判明した。身近に存在する丘陵地や里山が保有する伝統的な自然環境や生活システムに着目して、持続的な地域づくりに貢献し得るプロジェクトの確立に向けて、実直で、開かれた活動をさらに積み重ねてゆく必要がある。

## 引用文献

- 平吹喜彦・川村寿郎，2000. みつけよう，みつめよう，青葉山の自然 ―平成11年度宮城教育大学地域開放特別事業―. 宮城教育大学環境教育研究紀要，2：69-73.
- 広木詔三（編），2002. 里山の生態学 その成り立ちと保全のあり方. 333pp. 名古屋大学出版会.
- 亀山章（編），1996. 雑木林の植生管理 ―その生態と

共生の技術―. 299pp. ソフトサイエンス社.

川村寿郎・平吹喜彦・西城潔，2001. プロジェクト研究「宮城県の地域自然を生かしたフィールドミュージアムづくり（その1）―仙台北方丘陵の里山―」報告. 宮城教育大学環境教育研究紀要，3：89-96.

守山弘，1997. むらの自然をいかす. 128pp. 岩波書店.

大沢雅彦・大原隆（編），1995. 生物―地球環境の科学 ―南関東の自然誌―. 202pp. 朝倉書店.

武内和彦，1991. 地域の生態学. 254pp. 朝倉書店.

武内和彦・鷺谷いづみ・恒川篤史（編），2001. 里山の環境学. 257pp. 東京大学出版会.